

追悼 赤堀多美雄教授

経済学部長 渡 辺 邦 博

赤堀多美雄先生は、本年6月12日、それこそ忽然と逝かれた。昨年2月経済学部教授会の後、突然入院を告げられ、夏には数か月復帰されたものの、11月には同じく教授会の後で再入院を知らされたが、大学に戻られるには至らなかった。ただし、退院のご意志が固かったことは、今年度の講義概要を一瞥すれば明らかである。

現在健康状態を維持するのは誰にとっても必ずしも容易ではないが、赤堀先生は自動車などは一切利用されず、信貴山下駅からの通勤も「健脚商売」(池波正太郎「剣客商売」の口合)を自認しておられたので、病気の類には無縁の方だと理解していた。まことに人生とは不条理なものである。しかし、先生はご家族には恵まれていた。無宗教で行われた告別式で私たちは、赤堀先生のクラシック音楽理解を熟知した奥様の選曲や、お嬢様のご結婚式での良き父親振りを知ることができたのだった。

先生は、彦根東高校をご卒業の後、関西学院大学経済学部、同大学大学院経済学研究科修士課程および博士課程において豊倉三子雄教授の下で研究され、いくつかの大学や短大の非常勤講師を勤められた後、昭和59年に経済学部を創設した奈良産業大学経済学部が専門課程の学生を擁するようになった、昭和61年に理論経済学担当の専任講師として赴任された。63年に助教授、平成4年に教授となり、主として経済原論・経済変動論を担当され、他方で評議員経験を重ねられた後、平成13年には本学で育った最初の経済学部長に就任されて、原蓄段階を抜け出せない本学の本格的改革の旗手として、意欲的な活動を開始されていた。

近年大学での学問研究に対する評価について議論されているが、かつて、理論経済学研究のタイプとして、宇野弘蔵教授に代表される多産型と、久留間鯨造教授に代表される寡作型が挙げられることがあった。赤堀さんは後者に属するタイプだろう。先生たちが学問的アブテンティスとして出発された1970年代とは、マルクス経済学研究のピークとも言える時代で、マルクスという思想家を捉えるにも、初期と後期、さらには中期をも介在させるべきだと言われたり、その経済学の具体化である『資本』解釈にも、エンゲルス版の問題性、フランス語版の独自性などが強調された。そうした中であって、マルクスの主著『資本』を自らの明確な立場によって解体・再構成し、現代に適用されようとした豊倉教授の立場は独自のものであり、それを引き継ぎ、鋭い理論的立脚点によって、しかもその現実適用性を模索された赤堀教授にもまた、ある種の覚悟があったと推察される。『資本』のより具体的レベルである諸資本の競争段階の理論的諸問題、市場価値と生産価格から出発され、一時具体的諸問題である独占価格やシロス=ラビーニの参入阻止価格問題に手を染められたこともあったが、再び利潤率や再生産表式の検討を経て研究の出発点に戻られ、最近では研究室でも Sraffa について語られるのをよく聞かされた。前世紀末のソヴィエトの崩壊以降、とくに静かになってしまったわが国のマルクス経済学を支える学者として期待された赤堀教授であっただけに、各方面から惜しまれているのに相違ない。教授のお仕事の核心的部分については、とくにご投稿をお願いした松本有一教授の評価も参照されたい。

いま奈良産業大学は、外からの少子化の大波に見舞われているだけでなく、開学20年目を迎えて、内部改革という大きな課題に直面している。先生は、この過程の牽引車としての役割を果たすべく、大方の期待を集めて部長に就任された矢先だったから、その途中で先生を失ったことは、本学にとって大きな痛手である。しかし、残されたわれわれ一同は、先生のなしえなかった課題を完成すべく全力を尽くす所存ですので、どうか私たちをお見守り下さい。